

神田川

喜多條 忠

新書館

神田川

喜多條忠

新書館



新書

神田川

発行日 一九七四年二月一〇日 初版

一九七四年二月二五日 第四刷

著者 喜多條 忠 ©

編集 白石 征

発行者 坂本洋子

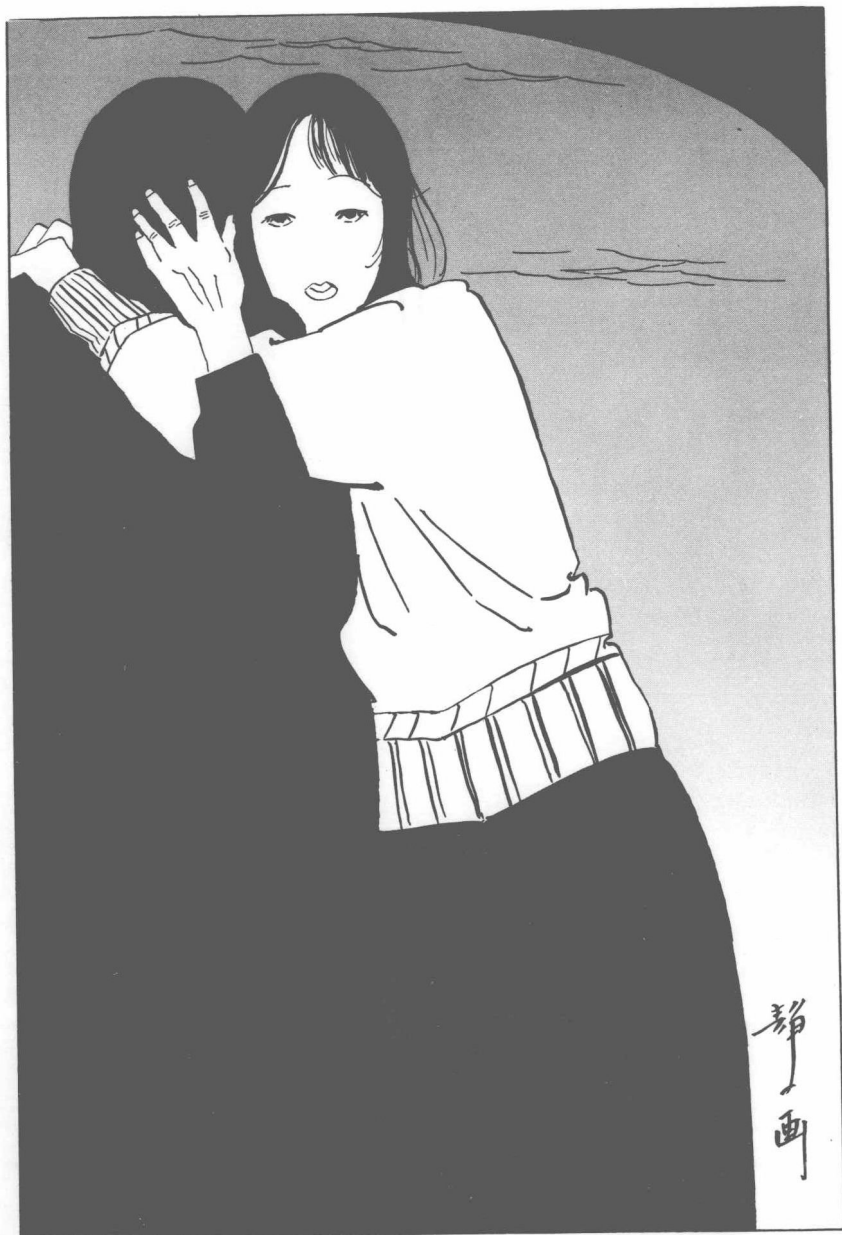
発行所 株式会社 新書館

112 東京都文京区千石二一二一七

電話 九四六・五三三二 振替 東京五三七二三

印刷所 K・M・S

神田川



あなたは もう忘れたかしら

赤い手拭 マフラーにして

二人で行った 横町の風呂屋

一緒に出ようねって 言ったのに

いつもわたしが 待たされた

洗い髪が芯まで 冷えて

小さな石鹼 カタカタ鳴った

あなたはわたしの 身体を抱いて

冷たいねって 言ったのよ

若かったあの頃 何もこわくなかった

ただあなたのやさしさが こわかった

……若かったあの頃 何もこわくなかった
ただあなたのやさしさが こわかった……

神田川*目次

春 冬 夏

147 23 7

表紙・挿画*林 静一
ブックデザイン*原田維夫

夏

夏の光に

夏の光に愛は勝てない

愛は消えた

愛は愛のなかに消えた

いつか

街であつたら

そのときは肩を叩いてね

私……きつと微笑^{わら}つてあげる

砂に埋まる砂のように

風に吹かれる風のように

愛の終わりに

愛をはじめて〈愛〉と名付けた

夏

傷つきやすい僕らの夏

盲^{めくら}の白い杖を背後から

まわって略奪するときのように

その後はどうなるかを考えない夏は

僕らにいちじくを縦に切り裂くほどの

手ごたえすら与えようとしな

いいんだよ 夏……

樹々が青く青く茂ったほうが

果実が豊かに大きく実をつけたほうが

僕らにとっていいんだろうなんて

もういいんだよ 夏……

僕は 風の匂う日に

リラの花の香りがする髪の毛の茂みに

動物たちといっしょに棲んでいたし

子供たちといっしょに舟が浮かぶ谷間を

のぞきこみながら石を拾い歩いたり

乾いた枝を思い切ってはらうと

びっくりするほどの清らかな水脈を

みつけたことだってあるんだ

だって 夏……

僕は白い粉砂糖のいっばいかった
フワフワするドーナツを口のまわり

まっ白にして食べるのが好きなのに

お前の fanatic な体温が

それを溶かしてしまつて白無しさ

いいんだよ 夏……

そんなに笑わなくても

お前の陽気な剽軽さは僕も大好きだし

こないだみたいに悲しげにうめかないでも

僕はお前をやさしく撫ぜてあげるよ

遠い夏

そうそう 今日縁日では

くるくる回る盤の上に止まった針の位置によつて

せんべいの数を

決められていた子供がいたつけ

一回十円 甘いくらみつ

一番甘いミルククリーム

ちよつとすっぱいあんずのジャム

僕たちの夏は遠い

遠い所にあるというのに

人々は夏の属性だけを先取りしようとして

失敗しているのに気付いてはいない

気付いているのを知っていても

それに耐えているのかもしれない

寝むべきベッドを^あ持とうとしない新宿の街

早慶戦の終わった夜

子供の顔をして大人の真似をしている人々が

旗を振って子供に還りそこねていた

僕たちの夕食

あなたがドライヤーで乾かす

豊かな髪の毛の黒い流れのように

僕のなかで波形模様が揺れる

トイレの小窓から見える線路の上を

長い貨物列車が通って行く

もうあの草色の山手線は車庫のなかで

疲れた足をさすって眠っているのだ

で 僕たちの食事はこれから始まる

ワサビノリと即席アラビアン焼ソバ

ハリハリ漬けとしその実漬け

煮干をポリポリとかじったあと

背骨をねじらせたその小さな硬い魚の頭が

ミイラになった蛇の頭そっくりなのに気付いて

あわてて手に持っていたものまで罐のなかにしまう